

リスニング教材における Authenticity の確保
—電話での対話の一方のみを聞かせる教材の可能性—

ノートルダム清心女子大学
達川 奎三

はじめに

教材開発をする際に、Authenticity を確保する重要性は周知のことである。しかしながら、電話での会話を用いた英語教材を見てみると、対話者双方の発話を提示しているものが圧倒的に多く、これは一方の発話しか聞くことのできない状況もある日常生活を十分に反映しているとは言いがたい。例えば、家族や知人による電話での会話を近くで第三者として聞き、その内容について色々と推論をするといった場面は、日頃多くの人が経験している。本研究では、電話での対話の双方を聞けるグループとその片方だけの発話を聞くグループに分け、聴解テストを行う。得られたデータを整理・分析し、その結果からリスニング教材（とりわけ聴解場面）の Authenticity を高める必要性を述べてみたい。

1. 先行研究（教材例及び実践例）

電話での会話を用いたリスニング教材を見てみると、そのほとんどが対話者双方の発話を提示しているものである。これは、重要表現の学習や定着、及び後に続くスピーキングの活動を意識したものと考えられる。この種のリスニング教材自体は有益であり、存在価値も大きい。しかし、発話の一方だけを聞くという状況設定の「リスニング教材」があまりにも少ないのも事実であり、この点に注目した研究も筆者が知る限りほとんどない。ただし、電話の発話の一方だけを聞かせる場面を扱っている教材や実践例としては次のようなものがある。

（教材例1）

電話での一方の発話を聞かせ、問いに対する解答を選ばせる。

Woman: (on the phone) Hello. Nick? ... It's me, Nancy. How was your history exam? I know you were sick and you had no time to study. ... Thank goodness! ... Boy, how did you do it? ...

Question : Did the man pass the history test?

Answer : He 1. passed the test.

2. didn't pass the test.

(NHK 『ラジオ英会話入門』 1994年4月号: 13)

（教材例2）

以下のような携帯電話を使ってのリスニング活動を紹介している。

AIMS: To predict the other side of a telephone conversation.

PROCEDURE: 1. Start the class as normal. The telephone will ring you suddenly (if you are doing the imaginary telephone call, secretly adjust your telephone so that it rings). 2. Look very surprised,

and ask the class if they would mind if you answered it. Have a brief conversation (6 - 10 changes), adjusting your language to the level of the class. Human curiosity being what it is, you will be guaranteed to have the full attention of the class. (以下省略) (Goodith 1998: 111 - 112)

このような教材は、学習者の好奇心を刺激し、聞きたいという気持ちを持たせると主張している。

(実践例)

授業中に米国にいる元ALTから電話がかかってきたという設定で、「進行形」を用いた表現を生徒に聞かせ、その指導に結びつける。 (楽山 他 2003: 43)

2. 研究の方法

電話での会話の双方を聞くグループ (以後 T 1 とする) と、その一方の発話だけを聞くグループ (以後 T 2 とする) に分ける。その内容について英語で解答させることにより、両グループ間に理解度の差があるかを探り、またどのような特徴的な誤答が出てくるかを見るために、以下のような実験を行った。

(1) 参加者

広島県内の女子高校生 2 クラス (T 1、T 2 ともに 40 名ずつ) の協力を得た。実際には 43 名ずつ在籍生徒がいたが、データ処理をする際に以下の生徒は除外した。

- ・英語ではなく日本語で解答をした生徒 (1 人)
- ・英語の習熟度が判断できない生徒 (5 人)

(2) 実施時期

二年生 3 学期の学年末試験終了後の授業 (2003 年 3 月) で実施した。

(3) 用いたリスニング教材

「スクリプト」を作成する際に、T 1 と T 2 の間に「情報量 (数)」の差、つまり the number of pieces of information に差が生じないように注意した。両グループの「情報量 (数)」に差が生じた場合、たとえスクリプトを完璧に理解できたとしても、T 1 は答えられても T 2 には答えられないという状況になるからだ。用いたスクリプトは以下の通りである。

対話者双方を聞く T 1 グループのスクリプト:

(Mike and Sakura talk on the phone.)

Mike : Hello. This is Mike. I'd like to talk to Sakura, please.

Sakura: This is Sakura. Hi, Mike. Have you finished packing yet?

Mike : Not, really. There are too many things that I want to take back.

Sakura: We'll all miss you very much. What time is your flight?

Mike : I'm leaving from Kansai Airport at 10:45 next Monday.

Sakura: I wish I could go to the airport to see you off, but the test week starts on Monday.

Mike : That's OK. You've helped me a lot with my Japanese. Thanks very much.

Sakura: It was my pleasure. You learned Japanese very fast. Actually I want to teach Japanese to foreign people in the future.

Mike : ...

一方だけの発話を聞く T 2 グループのスク립ト：
 Sakura: This is Sakura. Hi, Mike. Have you finished packing yet? ... We'll all miss you very much.
 What time is your flight? ... I wish I could go to the airport to see you off, but the test week
 starts on Monday. ... It was my pleasure. You learned Japanese very fast. Actually I want to
 teach Japanese to foreign people in the future. ...

「...」の部分に適切なポーズを取ってテープ録音した。

(4) 生徒が取り組んだ内容理解に関する問い
 T 1 グループしか持っていない情報、例えば「10時45分に関西空港から発つ」といった情報に
 関しては、問いの対象とならないように除外し、以下の3問を英語で答えさせた。

- (Questions) 1. What is Mike going to do soon?
 2. Is Sakura going to the airport? Why (not)?
 3. What did Sakura enjoy?

3. データの結果

(1) 解答の採点方法

生徒が書いた解答を、Ilyin (1976) が示した以下の基準を用い、3段階で採点をした。

Criteria for Evaluating Students' Performance:

- 0点 - Information given is inappropriate or unintelligible. (Grammar and structure may not be correct.)
 1点 - Information given is appropriate or intelligible. (Some mistakes in grammar and structure.)
 2点 - Information given is appropriate or intelligible. (No major grammar or structure mistakes.)

(2) 生徒が書いた代表的な解答とその人数

以下にそれぞれの問いに対して、生徒が書いた代表的な解答とその人数を示してみる。

1. What is Mike going to do soon?

Sakura & Mike の双方の会話を聞いた T 1 グループ

0点	
He is going (/will go) to the airport/Kansai Airport.	6 (15%)
He is going to take back.	2 (5%)
1点	
He will leave /is leaving Kansai Airport on Monday.	5 (12.5%)
2点	
He is going to leave Japan (next Monday).	5 (12.5%)

Sakura のみの発話を聞いた T 2 グループ

0点	
He is going to go to Japan.	3 (7.5%)
He is going to park (his car).	3 (7.5%)
1点	
He is going to flight (/fly) (from Kansai Airport) soon.	4 (10%)
2点	
He is going to leave Japan (/this country) (next Monday).	5 (12.5%)

2. Is Sakura going to the airport? Why (not)?

T 1 グループ

0 点

Yes (, she is). She is going (to the airport) to see Mike off. 9 (22.5%)

1 点

No, she isn't. She is going to have a test on Monday which he will left. 1 (2.5%)

2 点

No. (/She wants to go to the airport to see off Mike, but) She has a test next Monday. 8 (20%)

No, she isn't. Because the test week will start on Monday (/next week). 9 (22.5%)

T 2 グループ

0 点

Yes (, she is). She is going (/wants) to see Mike off. 13 (32.5%)

1 点

No, she isn't. Because she has the test week on Wednesday. 1 (2.5%)

2 点

No. She has (/takes) a test next Monday. 10 (25%)

3. What did Sakura enjoy?

T 1 グループ

0 点

No Answer. 5 (12.5%)

To teach Japanese to foreign people in the future. 1 (2.5%)

1 点

She enjoyed teaching Japanese. 4 (10%)

2 点

She enjoyed teaching Japanese to Mike (/Mike Japanese). 11 (27.5%)

T 2 グループ

0 点

No Answer. 6 (15%)

She enjoy(ed) learning (/studying) Japanese (with Mike). 6 (15%)

1 点

She enjoyed teach(ing) Japanese. 4 (10%)

2 点

She enjoyed teaching Mike Japanese (Japanese to Mike). 8 (20%)

両グループの解答の内訳を整理してみると、次の表のようになる。

表1. 両グループの解答の内訳

	T 1			T 2		
	質問 1	質問 2	質問 3	質問 1	質問 2	質問 3
0点	14	16	9	15	18	15
1点	13	5	20	11	5	16
2点	13	19	11	14	17	9

*数字は「人数」を示す。

(3) 両グループの「英語の習熟度」と「得点」

「英語Ⅱ」「ライティング」は参加生徒が二年次に履修した英語科科目の学年評価（10点満点）であり、両グループ間の「英語習熟度」における有意差を見る資料とした。「質問1～3」はそれぞれ2点満点であり、従って「得点の総計」は6点満点となる。

表2. 両グループの「英語の習熟度」と「得点」

	英語Ⅱ	ライティング	質問 1	質問 2	質問 3	得点の総計
T 1	5.55 (1.92)	5.83 (1.87)	0.98 (.83)	1.08 (.94)	1.05 (.71)	3.10 (1.81)
T 2	5.98 (1.89)	5.90 (1.98)	0.98 (.86)	0.98 (.95)	0.85 (.77)	2.80 (2.20)

*上段が「平均値」、下段（ ）が「標準偏差」を示す。

4. データの考察、及び誤答の特徴

t検定の結果、両グループ間に英語習熟度の目安と考えられる「英語Ⅱ」、「ライティング」においては、0.05水準で有意な差は見られなかった（英語Ⅱ $t = .998$, $df = 78$, $p = .321$ ；ライティング $t = .174$, $df = 78$, $p = .862$ ）。同じく、今回のリスニング・テストでの「得点の総計」と、そのサブカテゴリーとなる「質問1」「質問2」「質問3」のそれぞれにおいても有意な差が認められなかった（得点の総計 $t = -.701$, $df = 78$, $p = .486$ ；質問1 $t = .000$, $df = 78$, $p = 1.000$ ；質問2 $t = -.473$, $df = 78$, $p = .638$ ；質問3 $t = -1.205$, $df = 78$, $p = .232$ ）。このデータの結果から、電話での「双方の発話（T1）」と「片方のみの発話（T2）」を聞かせた場合とで、聴解において有意な差が出ないことが確認できた。

次に、両グループの誤答の中味について検討してみたい。質問1については、T2グループの3人が "He is going to park (his car)." と解答している。これは Sakura の最初の発話である "Have you finished packing yet?" の 'packing' を 'parking' と聞き間違えたのではないかと推察される。T1グループの場合は、Mike の2つめの発話 "There are too many things that I want to take back." という情報が、正しい理解の助けになったのではなかろうか。（ただし、T1グループの中には "He is going to take a park." と答えた生徒が一人だけいた。）

質問2について、最も多かった誤答は "Yes (, she is). She is going (/wants) to see Mike off." で

ある。その数はT1が9人、T2が13人であり、Sakuraの発話 "I wish I could go to the airport to see you off, ..." が、"I cannot go to the airport to see you off." の意味を含むことが理解できなかったのではないかと考えられる。ただし、T1の場合はすぐ後にMikeが "That's OK." (構わないよ。／気にしないでいいよ。) という、「見送りに行けないことを残念に思っている」Sakuraの心情に配慮した発言があり、理解の促進に役立ったのかも知れない。結果としては4名、つまり1割程度の差が両グループ間に生じた。

質問3については、T2の6人が "She enjoy(ed) learning (/studying) Japanese (with Mike)." と解答したのが特徴的である。一方、T1でこのような解答をしたのはわずかに1人であり、Mikeの "You've helped me a lot with my Japanese. Thanks very much." という部分のおかげで、SakuraがMikeに日本語を教えたという事実をイメージし易かったと思われる。

おわりに (教材開発への示唆)

本研究で用いたリスニング「スクリプト」と「問い」の場合、電話での双方の発話を聞くグループ(T1)と、その一方の発話だけを聞くグループ(T2)の間に、理解の程度に有意な差が認められなかった。このことから、日常生活でよく起こり得る、たまたま近くにて漏れ聞く場合などの、「一方の発話しか聞くことのできない電話での会話」を外国語教育教材としても十分に利用可能であることが分かった。リスニング教材の開発をする際に学習者のレベルに合ったテキストとタスクを準備するのは当然であるが、とりわけ取り組ませる「タスク」は challenging ではあるが、achievable なものを提供したい(Harmer 2001: 207-208)。小論で議論したタスクは、学習者に推論 (prediction) を要求する challenging なものであるが、高校生にとっても十分に achievable なタスクに成り得ることを示している。近くにいる家族や知人が電話で話しているのを第三者として聞くという行為は日常よくあることであり、このような聴解場面はまさに authentic であると言える。今後、このようなリスニング・タスクを盛り込んだ教科書教材が増えることを望みたい。

今回は高校生を対象とした研究であり、これを他のレベルの学習者、とりわけ中学生のような初級学習者にまで一般化するには、十分な注意が必要である。対話者双方の提供する「情報量(数)」に差が生じないようにするだけでなく、「情報の質」や「余剰性」などの点にも配慮した教材開発をすることが肝要であろう。また、今回は生徒の英語「習熟度」を「英語Ⅱ」「ライティング」の成績に求めたが、これらは厳密には「到達度」を示すものである。さらに「誤答分析」をする際にグループ全体を見ており、それぞれの「誤答」が、どの英語「習熟度」層(上位群、下位群)と相関があるかまでは見ていない。これらを今後の課題とし、研究を深めてみたい。

【参考文献】

- Harmer, Jeremy (2001) *The Practice of English Language Teaching* (Third Edition). Longman.
- Ilyin, D. (1976) *Ilyin Oral Interview*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- White, Goodith (1998) *Listening*. O. U. P.
- 達川奎三 (2003) 「ACEを意識した授業創造を ―教育実習生への処方箋」『英語教育』3月号、pp. 42- 45.
- _____ (1997) 「留守番電話を利用したOCの指導」『LL通信』No. 195, pp. 26- 28.
- 田中正道 (編) (1999) 『伝達意欲を高めるテストと評価』教育出版
- 日本放送出版協会 (1994) 『ラジオ英会話入門』4月号
- 楽山進、中嶋洋一 (2003) 「クラスが居心地よく感じるのはなぜ?」『英語教育』4月号、pp. 42- 44.